歴史探訪

文学に描かれる自然災害

尾形 明子
おがた あきこ
東京女学館大学 教授

1

2001年から2005年まで、50回にわたって日本列島の崩れをめぐって歩いた。『メディア砂防』の連載「水源地を訪ねて」の取材のためだったが、山の奥深くにある水源地にはなかなか辿りつけない代わりに、川に沿った上流の村々を歩いた。

どの村にも川の氾濫、土石流で亡くなった人々の慰霊碑があり、水害の記録がそのまま村の歴史となり、自然災害との闘いが、いつの時代も行政の課題となっていることを知った。山奥にまで堰堤やダムが造られ、にもかかわらず地震・台風のたびにいまなお多くの命が失われていく。日本の自然の美しさに歓声を上げながらも、一方、自分が生きているあらゆる場が、いつ崩れていくのか判らない危さの中にあることに改めて気付かされた取材の旅だった。

太古から続くこうした自然災害が、日本人の精神構造におおきく作用していることを思う。平安朝の優美な「もののあはれ」も、人間の命のはかなさ、明日のわからない不安が育てた美意識ともいえるし、「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし」と始まる鴨長明「方丈記」は、全篇、災害の記録であり、「無常観」の底には、大自然の猛威の前には、生死紙一重の実感がある。

ヨーロッパの堅牢な石造りの住居に対して、長屋から贅を尽した家屋まで、かつての日本の住居の大半は木と紙で出来ていた。どのように繊細な美を讃えられようと、石造りに比べたら脆いし、火災にも弱い。崩壊した住居跡に呆然と立ち尽くす人々の顔には口惜しさと同時に諦めが浮び、それは第二次世界大戦で、壊滅されたワルシャワの街を、生き残った人々が、煉瓦や石の破片を集め、カーテンの色まで同じに復元していった気の遠くなるような意志や忍耐力とはあまりに異なる。いまや色あせ静かな初秋の景色に溶け込んだワルシャワの旧市街を歩き回った時の感慨を思い出す。

もちろん地震と無縁の地だからこその石造りではあるが、木や紙の家には、自然災害に対してのどこか素直な諦めがある。人間の無力を知ってなお、しばしこの世に生きることを大自然に認めて欲しいと願う優しさと謙虚さが漂っている。闘う前にギブアップしたような。多分

日本人の血の中には、自然への畏敬と憧れ、そして多分無条件に自然が大好きという感情が流れているのではないか。自然を征服する対象と見る人たちとの違いは大きい。狩をし、肉食を主体とし、自然の猛威を堅固な石造りの建物によって防いで生きてきた人々は、今も自然をスポーツやレジャーの場として、人間の生活に組み込んで生きる。

とはいえ、今やコンクリートの高層ビルが羅列し、住居も都会はマンションが主流となり、私たちの生活もずいぶんと変わった。かつてよりはるかに自然災害に対して堅固になってはいる。でも、にもかかわらず、私たちの心の底には遺伝子のごとくに、かつての「もののあはれ」や「無常観」がこびりついているように思う。「自然に溶け込む堰堤やダム」と言ったら、「自然から人間を守るのに何でそんなに自然に遠慮する必要があるのか」とフランス人の友人が笑った。

2

こうした日本人の意識構造を、文学に探りたくて、自然災害が記された文学作品を思い浮かべてみた。〈戦争文学〉のジャンルは確立しているし、〈戦時下の作家たち〉の言説への研究は、今日もっとも求められているテーマでもある。私自身〈戦時下の女性作家〉と題して林芙美子を中心に書き続けている。人間が引き起こした戦争によるおびただしい死者たち、焦土と化した都市、計り知れない被害は、自然災害と並ぶ。人間が人間を殺しあう中で、おそらくは人間の数だけのドラマがあり、作家たちはそれを文学に残してきたのだが、〈戦争文学〉と並ぶ形での〈自然災害文学〉を見つけ出すのは難しかった。

もちろん前述の「方丈記」だけでなく、平安時代の「今昔物語」「宇治拾遺」にも災害の様子は詳しく記されているが、文学の手法で書かれたとはいえない。記録はおびただしくあるし、作家たちもエッセイや日記に詳述してはいるが、文学として真正面から取組んだ作品となると、今、私の中に浮ぶのは「宝暦大治水」と後に呼ばれる濃尾三川治水の幕命を受けた薩摩藩士が、平田靱負を中心に濃尾に赴き、役人や関係者のエゴイズム、疫病等々に阻まれながらも、果てしない水との戦いに挑む様を描いた杉本苑子「孤愁の岸」、大正15年5月24日の十勝岳の土石流を描いた三浦綾子の「泥流地帯」、江戸時代の浅間山の大爆発と村人の悲劇、復興へと立ち上がっていく姿を描いた立松和平の「浅間」――。おそらくはもっともっとあるのだろうが、私自身、これまで自然災害という視点で文学作品を見てこなかったことに今更ながら気がつく。が、作品の中に印象的に描かれた自然災害となるとこれはもう枚挙にいとまがない。次々とほとんどエンドレスに浮ぶ。猛威をふるう自然に、為すすべなく逃げまどい、閉じこめられ、身を寄せ合い、ただ治まる時を待つ中で主人公たちは幾重にも覆っていたものをかなぐり捨てる。凄まじい風雨に煽られるように、心の奥をさらけ出す。作品の重要な展開場面として、作家たちは自然災害をしばしばその背景としている。

台風

今ほど気象予報が発達していなかった時代、主人公たちはしばしば予想外の自然災害に見舞われる。

夏目漱石は、明治44年８月15日、和歌山県新和歌浦の県会議堂で講演を頼まれ、大阪から出かけるが、その夜暴風となる。電話は不通となり、往来の松の大木が倒れて電車も止まる。翌朝、漱石は人力車を雇い、平生の３倍の料金で和歌山に出て、10時の汽車で大阪に戻る。日記に詳しく記されたこの夜の体験が、やがて「行人」の32回～37回までに書き込まれる。

親戚の縁談に大阪に家族が集まった折、兄の一郎からその妻お直の節操を試して欲しいと頼まれた二郎は、雨模様を気にしながら和歌の浦に出かける。もちろん日帰りの予定だったが、その夜、台風が直撃する。電話は切られ、松が倒れて電車も不通となり、料理屋から二人は宿屋に移動することになる。

「電燈と車夫の提灯とが、雨の音と風の叫びに冴えて、恰も闇に狂ふ物凄さを照らす道具のやうに思はれた」。兄の依頼で仕方なく出かけてきたのだが、大自然の猛威に、二人の気持も昂ぶっていく。「周囲一面から出る一種凄じい音響は、暗闇に併つて起る人間の抵抗し難い不可思義な威赫であつた」。お直は、夫から信頼されないことの口惜しさを語り、死ぬのだったら自然の猛威の中で死にたいと言う。一郎に比して平凡な青年である二郎もまた「自分の頭の中には、今見て来た正体の解らない黒い雲が、凄まじく一様に動いて」いることを知る。後期3部作といわれる「彼岸過迄」「こころ」の間に来る「行人」のハイライトである。

戦後まもなくに書かれた大岡昇平「武蔵野夫人」は、武蔵野の面影の色濃い〈はけ〉と呼ばれる地に住む秋山道子と復員してきた従弟の勉の物語である。当時日本には、結婚している女性が他の男と関係することを禁じた〈姦通罪〉があった。夫からの親告によってのみ成立する罪だが、北原白秋が被告第一号として知られている。私大のフランス文学教授の夫との間は冷え、道子は勉に心惹かれる。ある日二人は狭山丘陵にある村山貯水池畔にピクニックに出かける。ラジオは「硫黄島附近に生まれ、八丈島から急に勢力を増した一つの台風が小田原に上陸して碓氷に向ってゐる」と報じていたが、ここは安全なはずだった。が、風雨が強まり、びしょ濡れになってホテルに辿り着いた二人は、そこで台風が急に進路を変えて小田原に上陸し、今まさにこの狭山丘陵に向かっていること、彼らが乗るはずの多摩湖線が配電線の故障で不通となったことを知る。追いつめられた道子はやがて絶望の中で死を選ぶが、その悲劇の予兆が込められた場面となっている。

同じ設定を松本清張は「波の塔」（昭和35年）において使う。青年検事の小野木は謎めいた美しい結城頼子に惹かれる。身延線の小さな温泉に旅にでた二人を台風が襲う。伊豆半島に上陸後、関東北部を通って日本海に抜けるはずだったが、直撃したという。暴風雨の中、電気が消え、頼子は自分には夫がいることを告白する。崖が崩れ、川が氾濫し、交通は遮断される。復旧に2・3日かかるといわれて、二人は徒歩で山を下りることを決意する。もはや姦通罪は廃止されていたが、政・財・官を巻き込んだ汚職事件の黒幕として頼子の夫が逮捕され、担当検事となった小野木と被告の妻頼子の関係がスキャンダルとして報じられ、頼子はひとり富士の樹海に入っていく。まさに行き場のない愛の背景としての〈自然災害〉であり、二人の愛のクライマックスに凄まじい風雨が響き、その行方を予言している。

地震

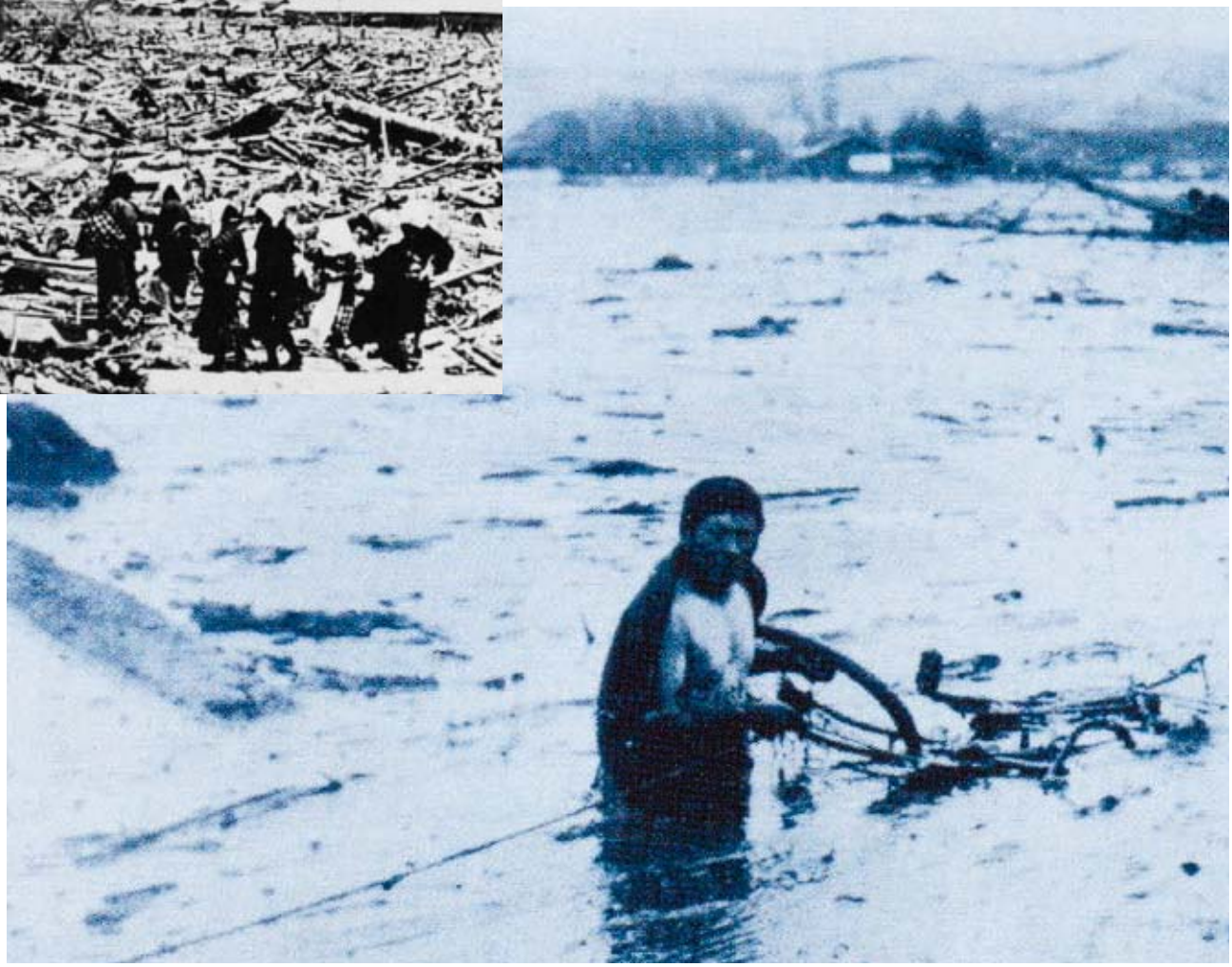
台風に比べると地震は、その破壊力のあまりの凄さと悲劇の大きさにおいて、文学作品の一場面とするには似つかわしくないのかも知れない。真正面から取り組まなくては、太刀打ちできるはずもなく、生な感想を日記やエッセイ、記録には残せても、作品化は難しいのだろう。阪神大震災から10年、おびただしいルポ、ドキュメント、さらに短歌・俳句・詩等の短詩形文学は書かれてきたが、管見では未だ小説の形にはなっていないのではないかと思う。

大正12年9月1日の関東大震災を作品の背景とした作品として、田山花袋の「百夜（ももよ）」が浮ぶ。「百夜」は、平安朝、美人の誉れ高い小野小町が、深草の少将に、百日通ってきたらその恋を叶えようと約束し、まさに満願の日、少将は大雪のために凍死してしまという故事を踏まえ、長年続いた芸者と作家とが、大震災の中で互いの愛情を確認し、作家が芸者を囲うことで成就するという、紹介するに少々恥ずかしいストーリである。が、崩壊し、まだ火が燻ぶる本所に恋人の安否を尋ねて駆けつける男の心情は鮮やかであり、作品の白眉となっている。

花袋にはその折の状況を細かに記した「東京震災記」がある。代々木の自宅から震災の3日目に新宿・赤坂・本郷と歩き、東京市内の惨状、竹槍を持った自警団が「真蒼な顔をした若い一人の男を皆なして興奮してつれて行く」様子もつぶさに記されている。5日目の朝、花袋は再び浅草に行く。新宿・大久保を通り、若松町から弁天町、小石川に入り伝通院から春日町、本郷台と歩くに連れて焼跡が広がり、湯島天神を出ると「もはやあたりは一面の焼野原」となる。辛うじて形を止めている厩橋を電線につかまりながら渡り、さらに吾妻橋から枕橋を通って本所に辿りつく。

「百夜」の背景というより、文字通りの東京震災記録であり、同じく花袋の「東京の三十年」と重ねて読むなら、興味尽きないことだろう。「東京の三十年」は、館林から丁稚奉公に出て来た少年時代、作家を志した青年時代、文壇に地位を築いて後と、それぞれの時代の花袋の目に映った東京がつぶさに描かれたエッセイである。

大震災の記録は林芙美子の「放浪記」にもでてくる。本郷の下宿から両親が住む新宿十二社まで余震に揺れる中を芙美子は歩き続ける。昨日払わなかった下宿代30円で、途中１升１円の米を２升、干しうどんの屑を50銭、それに青年から日傘を50銭で買う。町では女たちが「たった二三日のうちに、みんな灰っぽくなってしまって、桃色の蹴出しなんかを出して裸足で歩いてい」た。4里の道を歩き、日暮れに着くが、両親は引っ越してしまった後で、芙美子は広場に野宿する。翌日やっとのことで根津権現にまで来ると、「シャツを着たお父さんがしょんぼり煙草をふかして」待っていた。芙美子を探しに来る途中、朝鮮人と間違えられてやっとのことでここま



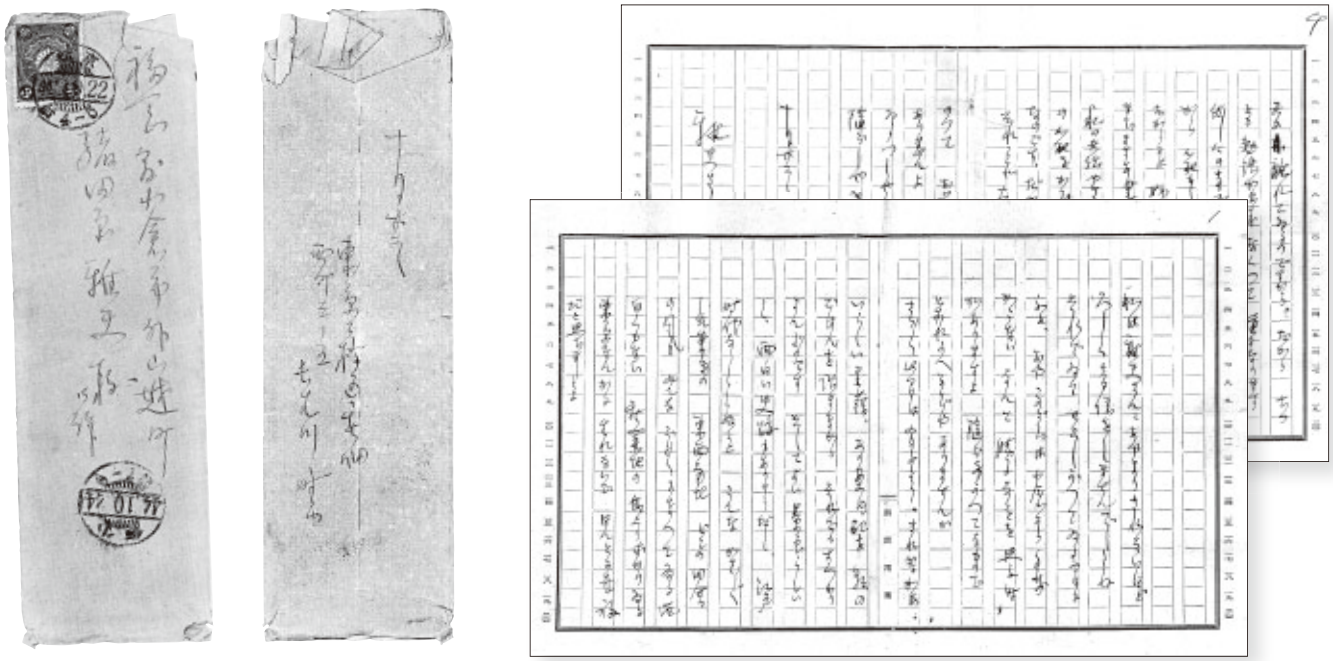
大正15年の十勝岳噴火。川からあふれた泥流の様子。　写真左上：泥流で破壊された上富良野の集落　（写真提供：北海道上富良野町教育委員会）

で来たという。道々に人を探す声が響き、産婆を探す声もする。芙美子はその後、酒屋関係の罹災者を関西に運ぶ船に紛れ込んで、尾道に向うのだが、命さえ無事なら失うものなど何もない若い娘の体験記は逞しい。

突然私の個人的体験を書くことをお許しいただきたい。十勝岳を取材で訪ねた2003年9月26日未明、実はマグニチュード８の十勝沖地震に遭遇した。一瞬ふあっと体が浮き上がったような気がして目が覚めた。かなり長く揺れが続き、起き上がろうとしたら足がふらついた。頭の上で激しく揺れる電燈に、自分が十勝岳の白金温泉に来ていることを思い出した。枕元に読みかけの「泥流地帯」があった。

三浦綾子「泥流地帯」には、土石流による地獄のような光景が描かれる。「大音響を山にこだましながら、見る間に山津波は眼下に押し迫り、3人の姿を呑みこんだ。拓一と耕作は呆然と突っ立った。丈余の泥流が、釜の湯の中のように沸り、踊り、狂い、山裾の木を根こそぎ抉る。バリバリと音を立てて、木々が次々に濁流の中に落ち込んでいく。樹皮も枝も剥がし取られた何百何千本の木が、とんぼ返りを打って上から流されてくる。と瞬時に泥流は二丈三丈とせり上がって山合を埋め尽くす。家が流れる。馬が流れる。鶏が流れる。人が浮き沈む。」

近年、宮沢賢治の作品を自然災害の立場から読み込み、研究しようとする動きがある。岩手県花巻で賢治が生まれた1896(明治29)年は三陸大津波が押し寄せた年であり、小学校に入学した1903(明治36)年から4年間、東北は大凶作にみまわれる。飢饉が続き両親を失ったグスコーブドリが、火山の爆発を自ら犠牲になることで防ごうとす



長谷川時雨の手紙

る「グスコーブドリの伝記」には、そうした身近な天災が色濃く反映している。1919年の岩手山大地獄谷の水蒸気爆発もあるいは契機になったのかもしれない。

津波

私の手許に劇作家長谷川時雨が九州小倉に住む少年緒田原雅夫に宛てた葉書と手紙の束がある。その中に明治44年7月26日未明、東京新佃島で遭遇した津浪について巻紙に毛筆で記したものがある。

「私の家は　これで海岸なのです。海岸といふとおかしいほど　まあ　入江ですね　隅田川の下流で　品川へはいるてまへの小さな島です　東京では新しい島なのです　つい近年まで　渡舟ばかりでしたが　今は深川区の方から　相生橋といふ橋が二本つながつてまんなかに小浜のある　東京一番の長い木橋がかかりました。（不明）とはいまだに渡舟です

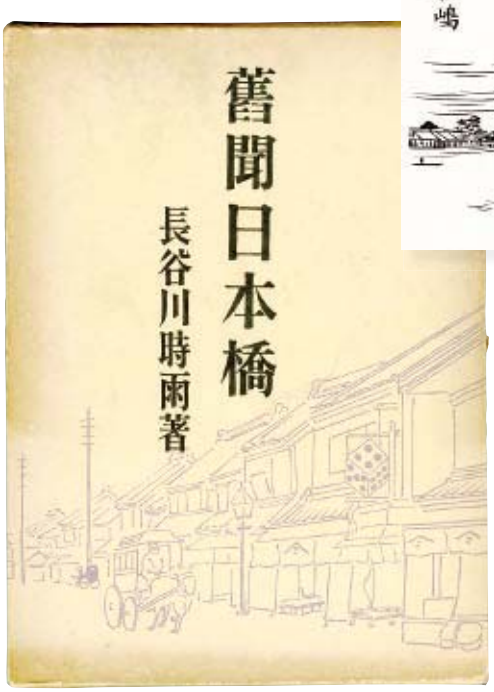
そんな處故　夏ごろのようなつなみなんていふ珍らしいものに逢つたのです　それでもやつと壁もふすまも出来上がりました。其かはり　つなみの為にびょうきになつた祖父はなくなりました。」

印刷された7月28日付の葉書には「謹啓　廿六日早暁に於る海嘯に就て御懇篤なる御見舞に与り幣家一同奉鳴謝候海水は床上二尺に達し多少の被害有之候が幸ひ家族一同無事避難仕り候間」云々とあり、この時の水害見舞いへの礼状だろう。

これらの書簡を緒田原雅夫氏のご長男緒田原涓一上智大学名誉教授から託された経緯については、1994年秋の「別冊文藝春秋」掲載の「時雨の恋文」に詳しく書いたが、明治末から大正期にかけての長谷川時雨とその背景が浮びあがってくる。

時雨は、日本で最初の女性歌舞伎作家で7冊の「美人伝」の作家でもある。昭和3年から7年まで女性作家の発掘・育成と全女性の連携を目指して文芸誌「女人芸術」を発刊、続いて昭和8年から16年まで102号のリーフレット「輝ク」を発刊し、女性文壇の大御所だった。

時雨は、江戸から東京に変わって間もない明治12年、日本橋通油町に生まれ、女に学問はいらないと小学校を卒業すると間もなく、池田侯の屋敷に行儀見習いに出された。18歳で鉄成金と結婚、釜石鉱山での生活を経て離婚し、明治30年代末から劇作家としての活躍が始まる。日本で最初の弁護士だった時雨の父親は、東京市の汚職事件に連座し、総てから遠ざかり、新佃島に松林が海に続く1000坪もの屋敷に隠棲していた。才覚のある母親



旧聞日本橋（箱装幀）

清親版画より「佃島」

は箱根の塔ノ沢で旅館を経営していたので、時雨は新佃島で主婦代わりの日々を送っていた。劇作家として活躍する一方で70歳の父親と母方の80歳になる祖父、それに弟や幼い甥の世話をしていた中での大津波だった。

昭和13年に出版された「旧聞日本橋」は、少女の目に映った町の光景が、時代の大転換期を辛うじて生きた人々の姿とともに懐かしく切なく浮かび上がってくる名品だが、その中に津浪の様子が詳しく書き込まれ、さらに津波が引き金となって生涯を硫黄鉱山発掘の夢に憑かれた祖父の死までが記されている。但し「明治43年の9月に佃島に津波が来た」という書き出しは時雨の記憶違いである。前年、箱根塔ノ沢を襲った土石流と混同したのだろう。

「京橋の築地河岸一体にまでその水は押し上げたほどで、洲崎や月島は被害がひどかった。庭の眺めになるほどの距離にある相生橋から越中島の商船学校前には、避難して来ていた和船が幾艘も道路に坐ってしまったほどで、帝都には珍しい津波だった。あたしの家は老人たちの丹精の小松が成長して、しっかり根をかためていたせいか、防波堤は崩れなかった。海水が高いと案じ油断はしていなかったが、うとうとと眠った夜中にチョロチョロと耳近く水の音をきいた。戸外の暴風雨にはまぎれぬ音なのですぐに目が覚めた。潮入りの池は島中でたったひとつだから、これは池があふれたな、近所に気の毒だとその瞬間に思ったが、よく目を覚ますとそれどころではなかった。何もかも浮き出して器物が活動している。ぼんやりしているのは人間だけだった。電燈は断たれた。幸いに満月の夜ごろだったから、月はなくても空は真っ暗というほどではない。離家から、二階にいた中学生の弟が裸で、胸まで水に浸かって、探検用の燈火をつけてやってきた。二匹の犬がザブザブと泳いで後についてきた。」

「水が引いたあと、ヘドロを掻くのと、濡れた衣物や書籍が洗いきれずに腐って、夜になると川へ流して捨てた。壁は上まで湿気が滲み上がっていた。額などは水に浸かりもしないのにパクパクして、何もかもが病気になった状態だった。あたしは二人の老人の健康を気づかった。離家の二階が一番乾いていたのと通風がよいので、みんなが其処に集まって暮すと、二人の老人はまだ互いに強がりはじめた。しかし、二人ともどこか悪くしているようすが見えた。」「医者に見せるとどこも悪くはないが死期が迫っているといわれる。初秋の風に竹がサラサラ鳴る暁、棺は出てゆくのだった。」（木魚の配偶）

明治44年、春陽堂から出された「東京年中行事」には「今年は修築落成祝と不景気挽回策とを兼ねて、盛大な祭典を行うべく、氏子の佃島、新佃、月島の三島にては、住吉神社の三巴の赤提灯を軒に吊るし、各町にてはそれゞ町名に因んだ揃いの浴衣を作って三本の山車を曳き廻し、佃島の子供連は稚児行列をなし、芸妓の手古舞もある外に、七日には縮緬の揃いを着た漁師連が、例によりて午前8時佃島一番地先から神輿を海中にかつぎ込み、（中略）神輿の海中渡御を行い、佃島、月島、上総澪を一周して月島11丁目に上陸、仮屋に宿泊し、翌8日、氏子町内を一周する筈であったが、7月26日の大津波にて氏子の被害甚だしき為、折角用意した山車を曳き出すこと出来ず、神輿の海中渡御も中止となったのは残念であった」とある。

3

いくつもの心に残る〈文学の中の自然災害〉の場面があるが、私にとっての圧巻は谷崎潤一郎の「細雪」である。「細雪」は、大阪船場に古くから続く木綿問屋蒔岡家の美

しい4姉妹鶴子、幸子、雪子、妙子をめぐる物語であり、昭和10年代の関西上流社会の日常生活が浮かび上がってくる。

鶴子は本家を継ぎ、分家して芦屋に住む幸子夫婦のもとに雪子、妙子の未婚の妹が同居する。古風で日本的美人でありながら30代半ばまで独身の雪子の見合いが作品の軸となっている。一方自由奔放な末娘の妙子は、男との恋愛事件が絶えず、幸子夫妻はその処理に奔走しなくてはならない。花見、蛍狩り、月見と四季折々の行事を、贅沢な着物に身を包んで4姉妹は楽しんでいるが、中国での戦争は広がり、生活はしだいに厳しさを増していく。そうした中で、昭和13年7月5日の大水害の様子は、圧巻というだけでなく、激化していく戦争に蒔岡家も、関西の上流社会も、日本中が巻き込まれていくことの不気味な予兆となっている。神戸市内にある六甲山の山津波が直接の原因だったが、7月3日から５日にかけて600ミリを越す豪雨が降り、河川の氾濫、堤防の決壊が相次いで、死者200人、行方不明者400人の犠牲者が出た。中巻（全35章）4－10章に、文庫本（新潮）316ページ中60ページを占めて谷崎はこの場面をつぶさに書き込んだ。

関東大震災を契機に関西に移住した谷崎潤一郎が、「細雪」の舞台となる住吉川畔の家に住んだのは昭和11年11月。船場の御寮人根津松子との9年越しの恋が実り正式に結婚した2年後である。松子と小学校に通う娘、松子の二人の妹との生活は、そのまま「細雪」に重なる。二女幸子の夫の貞之助が、谷崎にあたろう。華やかな舞いの会があった1ヵ月後の7月5日、朝からの豪雨の中を、娘の悦子が芦屋川沿いの小学校に出かけ、続いて４女の妙子が住吉川沿いの洋裁学院に出かける。間もなく川は氾濫し、貞之助は半身水に浸かりながら悦子を迎えに学校に行き、ついで妙子の救出に向う。すべての場面を引用したいほどに臨床感溢れる描写が続き、渦巻く泥流に流されていく人や家、避難する人々、泥だらけの死体――災害の様が人間ドラマをくっきりと浮び上げる。妙子はカメラマンの板倉のおかげで九死に一生を得た。死を覚悟して自分を救ってくれた板倉に、妙子はこれまで付き合ってきた同じ階層の＜ぼんぼん＞にはない魅力を感じる。

「細雪」は「中央公論」の昭和18年1月号、３月号に掲載され、次の６月号にも掲載予定で校正刷まで出来ていながら、贅沢な描写が検閲を通らず中断する。戦時下、疎開先の熱海で書き継がれ、全3巻が揃ったのは昭和22年末だった。「源氏物語」の現代語訳と共に、戦争で失われていく日本の伝統と美を、谷崎はひたすら文学に残すことを思ったのだろう。

その後谷崎は東灘区岡本に自らデザインした家を建て鎖瀾閣（さらんかく）と名付ける。昭和28年熱海伊豆山に転居するまでを過すが、平成7年の阪神大震災に全壊した。谷崎潤一郎記念館でもあったその家をかつて訪れたことがあったが、もし谷崎が生きていたら大震災もまた小説に描かれたような気もする。

人類の歴史は、自然、特に自然災害との戦いの歴史と言ってもいい。だとしたら私たちは文学にそれらを刻み付けていかなくてはならないし、〈自然災害文学〉のジャンルが〈戦争文学〉と並んであってもいいのだろう。

2008年2月、日本で開催される国際ペンクラブのテーマは〈自然災害と文学〉ということである。

省線（現在のJR）住吉駅に立ち往生し、土砂に埋まった列車

ガレキや流木の散乱する省線神戸駅前

昭和11年から18年まで住んだ「倚松庵(きしょうあん)」。ここで「細雪」を執筆、大水害を体験した。現在は一般公開されている。
阪神大震災で倒壊した「鎖瀾閣」はNPO法人谷崎文学友の会が復元に取り組んでいる。
写真提供：国土交通局近畿地方整備局六甲砂防事務所ホームページ
http://www.rokko.kkr.mlit.go.jp/